

研究課題	互いに伝え合う活動を通して、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
副題	外国語活動を通して、ふるさと「宇治」を教材としたコミュニケーション能力の育成
学校名	京都府宇治市立菟道第二小学校
所在地	〒611-0021 京都府宇治市宇治琵琶63番地の3
ホームページ アドレス	http://www.uji.ed.jp/todou2-es/

1 はじめに

本校は、平成23から25年度の3年間、京都府小学校教育研究会外国語活動部の研究協力校として、外国語活動における児童のコミュニケーション能力の育成を目的に研究を行ってきた。平成23年度から小学校教育において英語教育が本格的に始まったこともあり、何をどのように研究していくかを考えていかなければならない状況であった。その中で、英語嫌いをなくすために、児童の英語に対する関心・興味を高め、児童が自ら英語を使って話せるよう、体験活動を中心とした展開を進めていき、児童が英語を使う場面の在り方などを基本として進めていくこととなった。

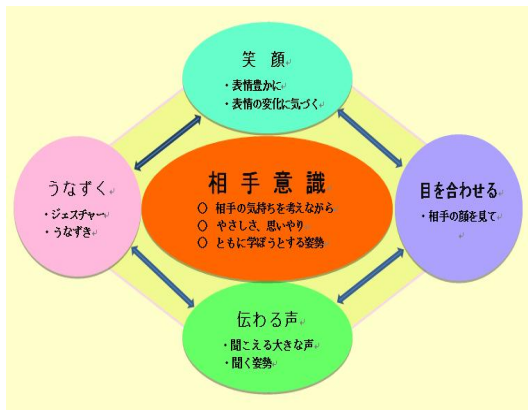
本校の位置する宇治市では、従来からAETといわれる英語指導補助が配置されていたが、平成24年度より市内全中学校区に1名配置となりさらに拡充された。本校にも毎週1回来校できる状況となり、そのことによりAETの活用も研究の視点に入れていながら研究を進めていくこととした。

2 研究の概要

① 本校での外国語活動とは

本校では、研究仮説として『自分の考えや相手の考えを「伝えたい」「聞きたい」という必然性のある活動場面を設定し、外国語（主に英語）の音声やリズムに慣れ親しませる活動を積み重ねることで、外国語活動に対する意欲が高まり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童が育つと考える。』と設定した。本校の研究活動では、学習指導要領で定められている目標の中でも、コミュニケーション能力の素地の育成を軸としている。小学校から英語教育を行う目的は何かを考えたとき、小学校では、クラス担任が全ての教科を教えるという点や小学生という発達段階を考慮したときに、中学校での外国語授業の延長線上として捉えるのではなく、小学生だからこそできる活動を進めていくことが必要と考えたからである。





<本校のコミュニケーション能力の素地>

② コミュニケーション能力の素地の育成

コミュニケーションという言葉は、よく使われる言葉であるが、外国語活動におけるコミュニケーション能力の素地とはどのようなものか、研究を進めていく中でこの点を明確にし、様々な先生方のご意見を参考にしながら以下のように捉えることとした。コミュニケーションの中心には「相手意識」があり、その意識の中には、相手の気持ちを考える態度、優しさや思いやりの気持ち、ともに学ぼうとする姿勢がある。その

相手意識を表現するために、さらに4つの観点「笑顔」「伝わる声」「目を合わせる」「うなずく」があるとした。これらの点が明確にすることで、授業での体験活動の在り方を考えたり、評価活動を進めていったりすることとした。

③ 学校教育活動を活用し、日常から英語に慣れ親しませる環境づくり

本校では、高学年で週1回、低学年、中学年で年間10時間程度の時間設定をしている。しかし、これらの時間だけでは十分ではないのは当然である。英語は言語であり、日常から英語を聞いたり、話したりする活動がなければなかなか定着していかない。また、本校職員の中で英語が堪能な教師も限られている。このような状況の中で児童に英語を慣れ親しませていくために、校内掲示物の充実、英語に触れさせるため、従来からある教育活動（朝の会や帰りの会で英語による司会、放送委員会での英語による放送、異年齢集団活動でAETを活用した行事計画など）の活用、ICTの活用を図っていくこととした。ICTの活用については、後ほど詳述する。



3 研究内容

本年度の研究で最も重視したのが「地域」を教材としたカリキュラムの作成である。宇治市は、京都府内でも有名な観光地があり、外国人も多く訪れる。さらに、宇治学（総合的な学習の時間）でも3年生から宇治に関する学習を行っている。こうした背景もあり、児童がより主体的に英語を使えるようにするために、児童にとって身近である「地域＝宇治」を題材にした教材作りに取り組んだ。

研究を行う上で、大きな問題点もあった。それは、英語が堪能な教師が少ない状況である。これから英語を学んでいく児童のために、英語の発音は大変重要である。しかし、教える側が正しい発音が困難な状況では充実した英語教育を行うことは難しい。これらの教材作りや問題点を解決するためにICTの活用を図ることが有効であり、ICTによる学習環境を充

実させることとした。

① 地域教材の開発 ～電子黒板の活用～

「Hi, friends 2」の中に道案内という単元がある。この単元では、児童が英語を使って道案内する。この単元を「宇治」という地域特性を活かした教材開発に取り組むこととした。具体的には、宇治市内にある観光地の地図を使い、AETがその観光地を巡るという設定で、児童が道案内するようにした。また、より実際に案内しているようにするため電子黒板を使って観光地の画像を画面上に写して行うようにした。また、単に児童が道案内するだけではなく、その観光地の説明を簡単な英語と日本語で説明を加えたり、児童が主体的にどのように案内したいのかを考えたりしながら取り組ませるようにした。



② パワーポイントを使った発音練習教材の作成

児童により正しい発音を習得できるようにするために、パワーポイントのスライドショーに外国人による音声を貼り付けて発音練習ができるようにした。英語特有の発音も児童が聞けるようになり、発音の微妙な違いも児童が聞き分け発音するようになった。また、これまで英語に苦手意識を持っていた教師も、自信を持って英語の授業をすすめることができるようになった。

③ ペン型音声装置を活用した校内掲示

本校校内には多数の英語に関する掲示物がある。しかし、絵やアルファベットの文字を見ても、学習していない単語を児童が読むことはできない。多くの掲示物があっても、何の意味もなさなくなってしまう。その解決として、取り入れたのがペン型音声装置（以下、



ペン) である。AETに協力してもらい、校内にある掲示物の単語をペンに録音し、児童が自分の聞きたい単語にペンで触れると音声を発してくれる。本校では、低学年や中学年で年間の授業数が少ない状況の中で、より多く英語に触れさせる方法の1つとして取り入れた。休み時間になると、ペンを持ち様々な掲示物の発音を聞く児童の姿が見られるようになった。

④ 英語学習を自習でできるパソコンソフトの開発

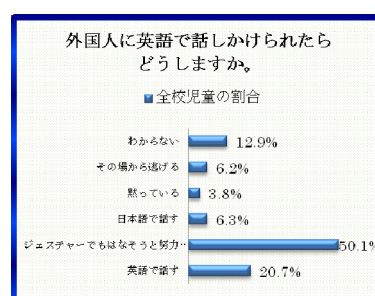
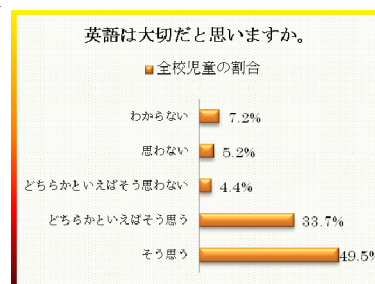
ペン型音声装置と同じように、児童が主体的に取り組めるように作成したのが、英語学

習できるパソコンソフトである。仕組みは簡単で、本校校舎を模した画面の中で、教室を様々な英単語の部屋（例：動物の部屋、国旗の部屋など）を用意し、その教室にはいくつかの英単語があって、クリックすると英語を発音するものである。音声は、外国人による発音したものをデータとして貼り付けてある。また、単に聞くだけではなく、クイズを用意するなどの工夫も入れた。ペン型音声装置と同じように休み時間になると、パソコンの前でクリックして発音を聞いている児童の姿がよく見られるようになった。また、時には一人で、友達と相談しながら取り組んでいる。



4 研究の成果

これまでの研究を通して、児童が英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度が育ってきた。右記の児童アンケートを見てわかるように、「外国語活動は楽しい」と感じる児童が全校児童の8割近くに達している。また、英語を学ぶことの大切さを感じる児童の割合も同じように高くなっている。さらに、注目することは、「実際に外国人に話しかけられたらどうするか」という問いに対して、7割近くの児童が、「英語で話す」や「ジェスチャーでも話そうと努力する」と答えている点である。本校が目指してきた児童の主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成がある程度できていると考えている。また、これまでの研究活動を通して、消極的であった教師の姿勢も変わりつつある。授業づくりにおいても、自信のなさから意見がでにくい状況であったが、ICTを活用することで、教師も発音などの点で自信を持って授業に臨めるようになり、その分意見交流も活発になり、授業改善にも積極的に取り組めるようになった。



5 今後の課題

課題として、あげられる点として以下の3つである。

- ① 児童の英語嫌いが全くなくなっていない
- ② 教師の英語運用能力の向上
- ③ 客観的な評価活動

ICTを活用することで、児童にとって楽しみながら英語に慣れ親しむ環境づくりや授



業の在り方を示すことができた。しかし、今でも英語の発音への自信のなさから児童も教師も不安を感じ、結果的に英語が難しい、英語が嫌いへとつながっている。これらの点を改善するためには、やはり学校生活の中で正しい英語の発音に慣れ親しませていくことが有効と考える。また、教師に対しても、研修の機会を設けて英語運用能力の向上を図っていききたい。また、ICTの活用が一定の効果を出すことがわかってきたので、児童にあったよりよい活用方法も合わせて考えていきたい。

平成32年度から小学校での外国語活動が教科として導入されることが文部科学省から公表されている。教科化することは、より客観的な評価を行っていく必要がある。教師の観察や「児童の振り返りカード」だけではなく、すべての児童に公平な評価の在り方についても今後の検討を進めていく必要性を感じている。

6 おわりに

平成25年11月22日に、本校において京都府小学校教育研究会外国語活動部の研究発表会を開催した。府内をはじめ、全国より多数の方に参加していただき、本校の研究について紹介することができた。ICTを活用した授業の様子やペン型音声装置、パソコンソフトも合わせて公開することができた。また、本校で作成した音声教材などをデータとして配布することができ、これまでの研究の成果を広めることができた。

